【研究ノート】

# 御所浦島民の水俣病経験に関する一考察
## ――先行研究の批判的検討と聞き書きの分析を通して――

飯　島　　力

# Preliminary Research on the Experiences of People Living with Minamata Disease in Goshoura Island: Through Critical Analysis of the Literature and Interviews

Chikara Iijima

要旨（Abstract）

This paper aims to critically analyze the literature and interviews on people living with Minamata disease（MD）in Goshoura Island. Located opposite to the shore of Minamata, the case of Goshoura Island has not been included in most of the literature on MD. However, as the case could be vital in reconsidering questions of the ways in which people express their experience of MD, this paper seeks to clarify both what has been elucidated and what has left out. The existing literature suggests that the case of Goshoura Island cannot be included as one of the areas affected by MD－in part because the geographical distance from Minamata determines their experience of MD in a complicated way. Based on this finding, field research should be conducted considering how the experience of the people of Goshoura Island has manifested in different forms of expression.

キーワード（Keywords）：海と魚、水俣病、公害、記憶、語りと沈黙

## １．はじめに

熊本県水俣市の対岸に位置する御所浦町（以下、御所浦）は、御所浦島、牧島、横浦島という３つの有人島を含む、大小18の島々から構成される［図１］。2015年度の国勢調査によると、人口は2,735人である(1)。行政区域としては熊本県天草市に属し、熊本県で唯一の離島の町である。平地が少なく田畑をつくるのに適した土地ではなかったため、不知火海が人びとの生活を支えてきたのだが［岡本1978：116-136；御所浦町2005：302-476］、チッソはメチル水銀を含む工場排水をその海に流し続けていた(2)。それゆえに驚くべきことではないかもしれないが、水俣湾周辺の漁村集落だけでなく、対岸の御所浦でも水俣病(3)の被害が確認されていた。

しかし御所浦島民は、水俣と違いそれほど活発な社会運動をしなかったことや、そもそも水俣病を話題にしないことがたびたび指摘されてきた。それは、御所浦では漁業で生計を立てる者が水俣以上に多く、基幹産業である漁業が致命的な打撃を負うことが恐れられたためである。その一方で、島の漁師たちは、人類の犠牲になった「魚族に対し感謝の意を表する」ために、1991年に石製の魚籃観音像を海辺に建立している。詳細は後述するが、熊本大学の田口［2004：193］は「観音像の建設と、水俣病についての漁師たちの沈黙との間に」深い苦悩を感じ取っている。御所浦島民のこうした水俣病経験を捉えるには、「沈黙か語りか（silent or speaking）」という閉鎖的な枠組みではなく、「沈黙しながら語る（silent and speaking）」という開けた（open-ended）視点が求められるだろう。こうした状

況はまた、「悲劇を繰り返さないための継承」が訴えられる今日、「継承」のあり方を無批判に捉えるのではなく、「いつ、どのような形で水俣病の経験は継承されるのか」という新たな問いに向けた可能性を示唆している。不知火海沿岸の広範囲で水俣病被害が確認されたなかで、御所浦のこうした経験や実践に光を当てることは、「島の視点」から不知火海やその魚たちを、そして（言葉にならない過去をときに背負いながらも）海・魚と生きる人間の営みを問う点で興味深い。

そうした興味深い点があるなかで、本稿では、御所浦の水俣病経験に関する先行研究を整理しながら、水俣病被害の「一地域」として一般化できない御所浦特有の経験について、聞き書きなどの文献資料から考察を試みたい。なぜなら、水俣病の研究に関しては在野知識人と大学研究者を中心に膨大な研究蓄積がある一方で、御所浦の水俣病経験についてはときおり議論されるにとどまり、なにが明らかで、どのような課題が残されているのかが不明瞭だからである。以下、第２節では水俣病事件において御所浦が「発見」される歴史的な過程を概観し、先行研究における御所浦の位置づけを検討する。続く第３節では、現地調査にもとづく研究から島民にとっての水俣病経験を検討する。そして第４節では、御所浦島民の聞き書きを時系列に沿って整理し、第３節で抽出されたテーマを検証する。「おわりに」では、第４節の検証結果をまとめ、今後の展望を述べる。

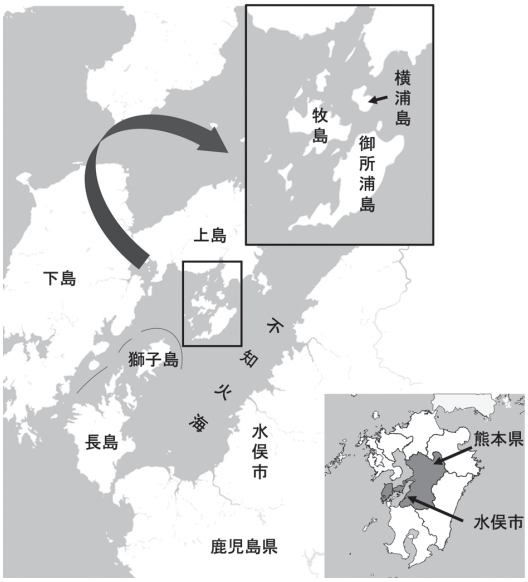

図１　不知火海沿岸の概要図

## ２．先行研究における御所浦の位置づけ

次節で検討する研究をのぞき、これまでの水俣病研究において、御所浦の事例はときたま言及されるにすぎなかった。その背景には、御所浦が水俣病事件に登場する歴史的な過程が大きく関係すると思われる。本節では、御所浦に光が当たる歴史的な過程を予備的に考察した上で、御所浦がいつ、どのような形で言及されるのか、その傾向と前提を主要な研究から検討する。

### ２．１　御所浦が「発見」される歴史的な過程

水俣病は、1956年５月１日が公式確認の日とされている。それはチッソ附属病院院長の細川一の指示で小児科の医師野田兼喜が、水俣保健所に原因不明の中枢神経疾患が多発している、とこの日に届け出たためである［高峰2018：47］。熊本大学研究班が1959年には水俣病の原因を工場排水中に含まれるメチル水銀であると明らかにしていたが、政府は1968年まで公害と認定しなかった。政府は水銀が水俣工場から流出しているという結論を先延ばしすることで、日本を代表する化学企業であったチッソの生産を維持しようとしたのである。この間、汚染された不知火海の魚介類を摂取することで起こる被害は、水俣湾周辺の漁村集落だけでなく、御所浦を含む不知火海一帯に広がっていった。

しかし、対岸の御所浦で起こる被害に、1971年まで研究者や行政の眼が向けられることはほとん

どなかった。その主な理由として、「1960年水俣病終息説」をあげることができる。記録映画作家の土本［2000（1979）：108-111］によれば、1959年後半から企業と国による「水俣病かくし」(4) が激烈におこなわれた結果、不知火海全域を対象としていた研究者の眼は水俣湾に固定された(5)。また、高峰［2018：30］が指摘するように、1959年後半とは患者とその家族が「見舞金契約」(6) に調印し、チッソが排水浄化装置のサイクレーター(7) を設置した時期でもあった。こうした要素が「水俣病の終息」という流れを加速させたのだが、それを決定的にしたのは熊本大学の徳臣晴比古らが1963年に提出した論文「水俣病の疫学」であった。この論文は、潜在患者がいる可能性を認め、追跡検診の必要性を述べる一方で、「1960年までで患者発生は終息した」という医学見解を提示した［宮澤1997：365-369］。その結果、御所浦での水俣病被害の発見はおろか、水俣においても社会的に「水俣病は終わった」とされたのである(8)。土本の言葉を借りるならば、1959年とは「まさに“水俣病始末”の年であり、不知火海対岸・離島が半永久的に放棄された記念すべき年でもあったのである」［2000（1979）：110］。

では一体、なにがきっかけとなり、御所浦をはじめとする天草・離島に研究者や行政の眼が向けられたのだろうか。それは1971年に「発掘」された「不知火海島民・毛髪検査成績書」である。これは熊本県衛生研究所が1960年から1962年まで不知火海沿岸島民の毛髪を集め、その水銀値を調べた記録である。行政はこのデータを秘匿していたが、水俣病研究会を支えた元NHKアナウンサーの宮澤信雄の努力によって、1971年に毛髪検査データが陽の目を見ることになった(9)［宮澤1997：403-415］。

この毛髪検査データがなによりも衝撃的だったのは、水俣から遠く離れた御所浦で高い水銀値が記録されたことである。３年間にのべ1,000人に近い人の毛髪水銀値が検査された結果、御所浦に平均値920ppm、根元430ppm、先端1855ppmを記録した女性が発見されたのである。水俣病の発症要注意の目安が50ppmであったことを考慮すると、920ppm が異常な高さであったことがわかる［高峰2017：29］。

いずれにせよ、この毛髪検査データがきっかけとなり、御所浦で患者の「発掘」がすすむと、1972年に初めて御所浦で水俣病患者が認定された。その後、御所浦では熊本大学地域医療研究会や水俣病認定申請患者協議会（以下、申請協）の懸命な活動もあり、1978年までに512名の認定申請者が出ることとなった［水俣病患者連合1998：219］。

### ２．２　「うして」られた御所浦の被害者

おおまかではあるが、以上の経緯を経て、御所浦は水俣病事件に登場した。そのため、島民を「うして」水俣病の典型例として扱う研究がほとんどである。「“うしてる”」とは天草地方の方言で「棄てること」を意味し、見捨てられ放置された被害者たちの存在を示すために用いられた。

たとえば、水俣病研究の第一人者で、患者とともに戦い続けた医師の原田は920ppmという毛髪水銀値を示した女性が、その結果を知らされることもなく死亡したことを述べ、この事例を「“うして”られた典型である」［原田1983：335］と指摘した。毛髪検査データを発掘した宮澤も同様に、920ppmを記録した女性に言及しつつ、天草をはじめ不知火海周辺で放置された水俣病の被害者を「うして」水俣病と位置づけた［宮澤1997：413-414］。また、不知火海総合学術調査団の羽賀は、その女性を「行政や医学や国や企業など、水俣病を隠蔽する連合体によって抹殺された象徴的な存在」［羽賀1985：141］とみなした。土本は、御所浦をはじめとする天草・離島の人びとを「遅れて来た

離島の被害者たち」［土本1991：5］として捉え、見捨てられた人びとの複雑な心情に光を当ててきた（詳細は次節）。「うして」られた、または「遅れてきた」被害者という位置づけは、御所浦の水俣病を主題としない研究からも確認することができる［井上2020：232；高峰2013：27；富樫2017：103-104］。

同様の傾向は、水俣病の被害者団体やその支援組織が発行する機関誌からも確認できる。たとえば、水俣病を告発する会の『告発』では、「放りっぱなしの十年」（1971）と題した記事で、毛髪検査データの衝撃とともに、御所浦の人びとが埋もれた存在であったことを報告している[(10)]。『告発』の後継誌である『水俣』では、行政が御所浦を放置してきた歴史だけでなく、1971年以降に急増する認定申請者について伝えている[(11)]。また、水俣病センター相思社が発行する『ごんずい』でも同様に、熊本県が毛髪水銀値の検査をしただけで、島の人びとに結果さえ知らせず黙殺してきたことが触れられている[(12)]。

さらにいえば、上記のような研究は、水銀汚染が広範囲に及ぶこととその深刻さを強調する「一地域」として御所浦を扱う傾向があった。これは、御所浦が水俣から不知火海を挟んで約13キロのところに位置することと、920ppmを記録した女性の存在が大きいと思われる。たとえば、原田は、「一九五九（昭和三四）年から六〇年の資料でも十分その汚染の濃厚さと広がりは知ることができる」［原田1989：44］と主張した上で、以下のように御所浦の事例に言及している。

> 不知火海沿岸には一九六〇年当時、約二〇万人が住んでいた。そして、患者も患者でないものも、不知火海を隔てた御所浦地区からも高値の毛髪水銀が検出された（患者で九六・八～七〇五ppm、当時発症していないものでも一〇〇～一九一ppm、御所浦では最高九二〇ppmの人が発見された）［原田1989：44］。

ここからは、御所浦と水俣との地理的距離や、920ppmという数値に言及することで、水銀汚染の深刻な広がりを強調していることがわかるだろう。

以上のように、水俣病研究において、御所浦島民は概して「うして」水俣病の典型例として、御所浦は水銀汚染が広範囲に及ぶこととその深刻さを強調する「一地域」として位置づけられてきたことがわかる。このような形で御所浦が言及されたのは、上記のような研究が圧倒的少数の被害者に寄り添いながら、水俣病の実態解明やチッソの過失立証を試みたためであろう[(13)]。ただし、上記の点が強調されるあまり、島民にとっての水俣病経験にはほとんど触れられていない。そのため、結果として、御所浦の人びとが類型化された「被害者」となってしまう可能性がある。そこで、以下では、実際の現地調査にもとづく研究を検討する。

## ３．現地調査にもとづく研究からみる御所浦の水俣病経験

管見の限り、現地調査にもとづく研究は、熊本大学の田口の研究、熊本保健科学大学の竹熊の研究、記録映画作家の土本の研究がある。いずれの研究においても、現地での経験にもとづいて、島民にとっての水俣病経験が考察されている。本節ではそれぞれの研究を概説し、そこから浮上するテーマを整理したい。

第一に、熊本大学の田口が地域ケアの共同研究として、御所浦に渡ったときの経験から記述したも

のがある［田口2004：188-196］。たとえば、田口は島民が患者であることを名乗り出るのには相当の勇気を必要としたと述べ、その理由を以下の３点から説明した。①町行政は国民健康保険料が高くなることを恐れ、水俣病の認定申請をしないように圧力をかけていたこと、②水俣以上に漁業で生計を立てる割合が多く、水銀によって魚が汚染されていることは島の基幹産業に致命的な打撃をあたえる可能性があったこと、③水俣病にかかったとわかると、娘の縁談がまとまらなくなるという事態があったこと。実際に調査中、「患者認定のことを口にすることは、タブーであるかのように感じられた」［田口2004：192］といい、「訪れた町役場でも、町の社会福祉協議会の事務所でも、水俣病のことは話題になることはなかった」［田口2004：192］という。そして、「母なる海」と「永しえに人類の犠牲となってゆく魚族」に感謝の意を示すために、島の漁師が建設した魚籃観音像に触れて、「観音像の建設と、水俣病についての漁師たちの沈黙との間に」［田口2004：193］深い苦悩を、田口は読み解いている。ここからは、（A）「水俣病経験に関する沈黙」、（B）「海・魚との親密な関係」というテーマが浮き上がってくる。

第二に、熊本保健科学大学の竹熊が、御所浦の保健婦として1985年から３年間勤務した経験から記述した研究がある［竹熊2005：71-92］。この研究では、保健婦としての実際の活動だけでなく、御所浦のなかでの水俣病経験が「のさり」をキーワードに考察されている。「のさり」とは熊本地方の方言で「恵み」や「授かり物」を意味するが、竹熊はこの言葉が「生活のなかで困難な状況に対する対処の方法として根付いていく」［竹熊2005：87］ことに懸念を表している。

> 地域の中で自分たちの力ではどうしようもない状況が起こったとき、例えば工場排水の垂れ流しの被害を受けてしまったときなど、そのことさえも「のさり」として内包することで対処してしまう可能性を持つ［竹熊2005：87］。

竹熊によれば、「のさり」は日常的には良い意味で使われる場合が多い（たとえば、「大漁」や「いい嫁に恵まれた」ことを意味するとき）。しかしながら、「魚が捕れたときはもちろんだが、チッソ工場排水により魚が捕れなくなったことも、売れなくなったことも、自分の身体がメチル水銀により侵された状態のことも、『水俣のお金』をもらったことも、全てが『のさり』と片付けられてしまう」［竹熊2005：89-90］可能性がある。その場合、御所浦での「のさり」という納得のさせ方は、水俣病を「地域の受難として封印されることを許してしまう」［竹熊 2005：92］というのである[(14)]。

以上のように、竹熊の研究からは、（C）「のさり＝受難」が浮かび上がる。ただし注意したいのは、竹熊が偶然遭遇した個別事例から「のさり＝受難」を指摘している点である。現地の人びとの語りが散発的に提示されているのみで、語り内容の文脈化（たとえば、いつ、どこで、誰に向けて、どの立場の人が何を発言したのか）は試みられていない。そのため、御所浦で遭遇した人びとの一連の行為のなかに、「のさり＝受難」を読み取るには追加検証をする必要があるだろう。

そして第三に、記録映画作家の土本が残した記録がある。土本は、水俣病汚染地域の「暗黒部」といわれた天草の島々を「巡海」しながら、彼の製作した映画を上映した[(15)]。「不知火海・巡海映画」と称されたこの旅は、1977年に御所浦を含む天草の島々を99カ所、約100日間の日程でおこなわれた。旅の詳細な記録は『わが映画発見の旅』［土本2000（1979）］にまとめられており、本稿では、そのなかでも御所浦に関する記述を中心的に考察したい。

まず、土本は町の医療機関が水俣病へ反発的な態度をとることを述べている。たとえば、町のある医院は、申請患者に給付される水俣手帳での診断を露骨に毛嫌いするという。そのような態度は町立診療所も同様で、この診療所からも、上記の医院からも水俣病患者は出ていない。これとは別に、原田らの自主検診グループ（大浦、元浦地区）、熊本大学第二次研究班と民医連系の医師団（嵐口、外平地区）が潜在患者を見つけ出し、認定申請をおこなう活動をしていた[(16)]。その成果もあってか、土本が御所浦を訪れた時点で、130人の申請者と17人の認定患者が出ていた［土本2000（1979）：225］。つまり、御所浦では、町行政や町立診療所とは無縁な在野のボランティア活動によって、潜在患者が探し出されていたのである。

その後、土本は御所浦の「首都」である本郷や嵐口で映画を上映していくなかで、認定申請者の複雑な心情を感じ取っていく。先述したように、御所浦で潜在患者を見つけ出す活動は、自主検診グループによっておこなわれた。しかし、島民が自主検診活動に参加することは、結果的に、水俣病に反発的な態度をとる町（体制側）への批判とつながる可能性があった。

> 医学グループは町当局の反（アンチ）水俣病の姿勢をよく知り、患者ゼロの背景を熟知するゆえに、おもてから町の行政のルートをたどって自主検診するといったあきらかな徒労は避けてきた。僻地にあって水俣病事件史を切れ切れにしか知り得なかったひとびとは自分の健康障害を確定し、救済の方法を知らせてくれた医師たちに感謝し、申請する途を選んだ。だが、医師団や自主検診グループの去ったあとは、それぞれ“かくれ申請者”になって、町当局やボスの追求からのがれようとする［土本2000（1979）：234］。

このような町行政との緊張関係から、土本の映画会に顔を出さない「かくれ申請者」が多く存在したという。申請協・御所浦支部の結成に大きな役割を果たした白倉氏は、申請者が隠れることで自分自身の足をひっぱるだけでなく、いまだに陽の目をみない潜在患者の足もひっぱっていることを嘆いている［土本2000（1979）：232-233］。

そして、御所浦のなかの最果ての地、横浦島と牧島を訪れたところで、土本の記述はおわる。この二つの島が、不知火海巡海映画の最終地であった。横浦島は国・県が1971年に実施した一斉検診から外されており、「記録なきところ被害なし」の典型例であったことが指摘されている。一方で、牧島は御所浦のなかでも水俣病に関する情報が少ない集落であったが、当時の区長が申請活動を主導していることが描写されている。

土本は、いずれの島においても、潜在的な水俣病患者が多く存在することを記述しているのだが、総じて、御所浦の水俣病を次のように特徴づけている点がとくに印象的である。水俣での急性劇症型水俣病とは異なり、知らず知らずのうちに長期間微量に摂取したことによる慢性、全身症型の水俣病が御所浦にはある。それは、「水俣・水俣病」とは時差をもって計るべき「不知火海水俣病」なるものであろう、と［土本2000（1979）：240］。土本はまた、別の著作で、御所浦のある婦人の話を紹介している。この婦人の毛髪水銀値は、以前に600ppmを記録していたが、最近の毛髪検査で900ppmに達したという。

> 「そりゃそうですばい。ずっと魚（いお）をたべとるもんですけん。わたしゃ魚がたべられんなら、死

んだも同じですばい。〔……〕体に悪かことは知っとるけん、好きじゃもんね。何でやめられるか。もう体に入った水銀は出てこんちゅうじゃろ。それならいっしょたい。好きちゅうことはじぇったいやめられんもんですばい。これは業たい。」［土本2004（1974）：228］

この語りは、「不知火海水俣病」が知らず知らずのうちに進行しただけなく、「海・魚との親密な関係」と重なり合いながら生じたことを示唆するのではないだろうか。なぜなら、この婦人にとって、仮に水銀に犯されたとしても、魚への愛着は変わらなかったと思われるためである。この意味で、「不知火海水俣病」という経験のされ方は、医学的なものだけでなく、島民と海・魚との関係から広く捉える必要があるだろう。

以上、現地調査にもとづいた研究を概観してきたが、ここからは、前節で検討した研究から捨象された御所浦島民にとって水俣病経験に光が当てられているといえるだろう。それぞれの研究からは、（A）水俣病経験に関する沈黙、（B）海・魚との親密な関係、（C）のさり＝受難、（D）不知火海水俣病というテーマが提示されていた。ただし、竹熊の研究で顕著なように、調査者がある時点で遭遇した個別事例にとどまっていることは否定できない。そこで以下では、抽出されたテーマを御所浦島民の視点から検証したい。

## ４．御所浦島民が残した聞き書き

本節では、上記で提示されたテーマを聞き書きから検証し、島民にとっての水俣病経験を考察する。被害者団体やその支援組織が発行した機関誌や図書を網羅的に読み込み、御所浦島民の語りをピックアップしていった結果、計16名による語りを抽出できた［岡本2015；栗原2000；小林1986；角田1983；羽賀1985；水俣病患者連合1998；水俣市環境創造みなまた実行委員会1996；水俣病センター相思社1994, 1995, 2002；森1997］。分析にあたっては、語りが対象とする時期を時系列に沿って整理し、語りの場所が重要と思われる場合は脚注で補足した。

### ４．１「対岸の火事」としての水俣病（1950年代～ 1960年代）

まず、御所浦島民の語りを検討した結果、魚の浮上やネコの狂死（人体汚染に先行して水俣病の指標となる現象）という異常な事態に1950、60年代から気づいていた、という語りが多くみられた。たとえば、申請協・御所浦支部三代目支部長の松村氏（1941年生まれ）は、早くて1955年頃からネコ、ブタ、イヌが狂い死にし始めたと証言している［水俣市環境創造みなまた実行委員会1996：57］。二代目支部長の荒木氏（1931年生まれ）は、1960年頃には魚が大量に浮いていたといい、その様子を次のように語っている。

水面いっぱいに浮いてしまって、ヒレをピリピリ動かして、まだ生きとる魚も多いわけです。〔……〕タチなんか潮目に沿って浮いて、海が真っ白く映ったですもん［栗原2000：63］。

似たような証言は水俣病で夫を亡くした森氏からも聞くことができるが［水俣病センター相思社1994：5］、より具体的な地点をあげて説明した人たちもいる。たとえば、旅館業を営む島田氏は、1959年頃、獅子島の片側港に行く途中に、タチウオが潮の流れに乗って浮いているのをみたという

写真１　ノサバ岬（筆者撮影）

［岡本2015：62］。また、上記の松村氏によれば、1960年頃の百間港はヘドロが溜まりすぎて、大型船が入れなくなっていた。そのため、百間港に大型船を入れるための浚渫工事がおこなわれたのだが、そのときに百間港にあったヘドロは御所浦のノサバ岬に捨てられた［写真１］。そして、ちょうどそのころ、タチウオが真っ白になって浮いていたという［水俣市環境創造みなまた実行委員会1996：58］。御所浦から獅子島の片側港に行くにはノサバ岬付近を通過することを考えると、両者は同じような時期と地点で、真っ白に海面を覆い尽くすタチウオを目撃していた可能性がある。

しかし、御所浦島民が、そのような異常な状態を水俣病と結びつけることはなかった。たとえば、上記の白倉氏（1910年生まれ）は、ネコの狂死を伝染病として位置づける一方で、魚の浮上を「労をせずして利益を得るもの」として捉えていたという［水俣病患者連合1998：149-150］。そして、彼にとって、水俣病は「対岸の火のような感じ」［水俣病患者連合1998：150］であったという。同じく御所浦の漁師であった松崎氏（1936年生まれ）は、当時のことを次のように語っている。

> 自分でカシ網をする時は、約半分位、水俣に行きよったです。〔……〕水俣病て知らんかったけんねえ。魚が浮かんどればな、とってきて食べよったたい。〔……〕何でこがん太刀魚の浮かんどっとだろうかて、それ位のもんだったい［水俣病患者連合1998：161］。

加えて、御所浦は離島であるがゆえに、1960年代までテレビや新聞によって情報を得ることのできた人がほとんどおらず、身体の具合が悪くても水俣病と結びつけて考える機会がなかったという[17]［水俣病センター相思社1994：５］。そのため、1960年代頃の水俣では水俣病への恐れから魚が消費されない傾向にあったが、御所浦では「水俣病て知らんかった」という人が多く存在した可能性がある。ただし、水俣で浮いていたタチウオは身体に悪いから食べなかったという声もあり［水俣病センター相思社1995：10］、どの時期のどの海域で捕れた魚なのかによって、島民の対応が異なっていたと思われる。いずれにせよ、水俣との地理的な距離から異常な事態を水俣病にひきつけなかったこと、水俣病の存在をそもそも把握していなかったことが語りから提示された。これらの語りはまた、知らず知らずのうちに魚介類を摂取したことを暗に示しており、(D)「不知火海水俣病」の一端を提示しているといえるだろう。

御所浦の漁師たちは、水俣との違いとして、魚の消費量についてしばしば語っている。松村氏によれば、御所浦には魚を自分で捕って自分で食べる人が多く、魚を買って食べる水俣の人とはその量に違いがあるという［水俣市環境創造みなまた実行委員会1996：60；水俣病センター相思社2002：78］。荒木氏の語りからは、そのような魚を中心とした御所浦の食生活を垣間見ることができる。

> 魚がご飯で、芋・麦がおかずのごたる食べ方だったです。だけん、もう魚の食べ方が他とは全然

違うわけです。いつも刺し身が多かったですが、なかでも多いときは大きな魚鉢（さかんばち）に三つぐらい、山ほど盛って食べ放題です。そして、それを朝、昼、晩と食べよった。自分で捕って食べて、漁に行かない家には分けてあげて、もう島の人間はみんな魚を食っとるわけです［栗原2000：57-58］。

荒木氏の語りは、魚が御所浦の食生活に深く根付いていることを強く示唆する。また、この語りを聞くと、先にみた「魚がたべられんなら、死んだも同じ」という婦人の言葉は文字どおりの意味でもあったことがわかる。こうした日々の食生活をとおして、(B)「海・魚との親密な関係」は形作られていたのかもしれない。

### ４．２　水俣病患者の確認から1995年の政府解決案の受諾まで（1970年代～ 1990年代）

先述したように、1972年に御所浦で初めて水俣病患者が確認された。その後、御所浦でも水俣病の症状をもった人が多く発見されていくのだが、当初、認定申請は増えることがなく、むしろ申請が見送られる傾向にあった。その理由として、多くの聞き書きで言及されたのは、御所浦では漁業で生計を立てる者が水俣以上に多いことである。御所浦の申請運動を支援した小林氏（1955年生まれ）は、その点に関して以下のように述べている。

水俣がチッソの城下町であるならば、御所浦は未だに現在も漁業が主体の、何をおいても漁業以外の産業は考えられない、漁業あっての御所の浦[18]［水俣市環境創造みなまた実行委員会1996：61］。

事実、御所浦の漁業経営体数を不知火海沿岸地域と比べると、その数は群を抜いて多く、現役の漁師町であることがわかる[19]。土本は1976年の資料から天草の不知火海沿岸16漁協のうち御所浦の３漁協だけで総漁獲量の３分の１を占めたことに触れて、漁業専業の島であったことを指摘している［土本2000（1979）：224］。このように漁業によって島が成り立っていたため、のちに申請協・支部長になる松村氏でさえ、当初は水俣病の認定申請に反対の立場であったという。

水俣病とか見苦しい公害病なんかはですねえ、この島には通用しないように私は思っとった。なぜかと言えばですねえ、魚を食べて水俣病にかかるとなれば、御所浦は、もう、魚を捕って生活せにゃあいかんわけやから、魚が売れなきゃ御所浦は絶望になるわけやからなあ。それでやっぱり、魚を食って水俣病になるとかなんとか、本当に問題外やったと、私自身［水俣病センター相思社2002：74］。

ここでは、御所浦で水俣病患者が確認されることにより、基幹産業である漁業が致命的な打撃を負うことが恐れられたことをうかがえるだろう。また、「水俣病はこの島に通用しないと思った」と語るように、海に生きてきた人びとにとって、魚が汚染されていることはにわかに信じがたい出来事だった可能性がある。岡本［2015：62］が指摘するように、「工場の排出したメチル水銀で魚介類が有毒化するなど歴史上初めての事態であり、魚介類に依拠してきた漁師の本能外の出来事であった」のかもしれない。いずれにせよ、この語りは（B)「海・魚との親密な関係」が絶大な信頼に裏打ち

されていたことを表しているのではないだろうか。

その後、医学グループの賢明な活動によって、認定患者数が徐々に増えていく。しかしながら、当初、認定患者にはすさまじい差別が、検診活動には激しい抵抗があったという。たとえば、山崎氏（1930年生まれ）は患者連合の一員で、1977年に水俣病に認定された夫をもつ人物であるが、1973年頃に認定された人は唾をひっかけられたりしていたと証言している［水俣病患者連合1998：172-173］。また白倉氏は、潜在患者を見つけ出す活動を当初から支援したために「村八分」状態であったという［羽賀1985：166］。地元の若い漁師たちは、検診にきた医師に石を投げて追い返したという話まである［小林1986：68］。ここからは、漁業の町での検診活動は一筋縄ではいかないものであったことが理解できるだろう。

さて、管見の限り、聞き書きとして刊行されたもののなかでは、1995年の政府解決案[20]に関する語りが時系列的にもっとも新しいものである。これは多くの被害者が1995年の政府解決案を受け入れ、運動が一段落したことが関係していると思われる。この1995年の政府解決案に対し、御所浦島民はどのように感じていたのだろうか。長年、運動を牽引してきた松村氏は、以下のように複雑な心境を語っている。

> 95年のことを私なりに本音をしゃべらせてもらえばですね〔……〕解決ということは本当にですね、残念と思いますよ。〔……〕やっぱりもう、患者が高齢化してしもうとるわけですから「もういくらでん良かけん、解決してくれんな、いい加減に」と〔……〕自分のことだけ考えるわけにはいかんので、やっぱり、患者の声を聞いたらですね、これでもう飲まにゃあいかんだったっだろうなあと、私は今でもそう思っています［水俣病センター相思社2002：77］。

この語りからは、運動の長期化に伴う当事者の高齢化を考慮して、松村氏が政府解決案を受諾したことがわかる。また、政府解決案を「残念」なものとして位置づけている点からは、(C)「のさり（＝受難）」として受け入れている様子は見受けられない。

90年代といえば、水俣では「もやい直し事業」[21]が始まるなど、「水俣病の教訓を継承する」という方向に歩み始めた時期である。しかし、90年代の御所浦では「町役場や診療所など公の場で水俣病の話がタブーに近い扱い」［水俣病患者連合1998：143］であったといい、語りからは町行政の非協力的な態度が示唆されている。たとえば、運動に携わってきた松崎氏は、1995年の政府解決案受諾後の未来について語るなかで、以下のような言葉を残している。

> この頃思うとっとは、御所浦町にも「もやい直しセンター」[22]のごたる所がほしかなあ、て言いよる。町長さんがそげんとは作らんでもよかて言わしたて言うことばってん、もうちょっと患者の気持ちを理解して欲しいかと思うわけですよ。漁師ていう者は芦北もんがこっちに来る、こっちのもんがあっちに行くて、だいたい水俣病ちとが水俣地区の人だけじゃなく同じ被害を受けとるわけだから、御所浦は特に漁で生活を立てて来たわけでね［水俣病患者連合1998：163］。

ここでは、水俣の漁師と同じように、不知火海で生きてきた漁師であるからこそ、御所浦で「もやい直し」をする必要が示されている。しかしながら、松村氏が1995年に指摘するとおり、御所浦で行

政主体となって水俣病を語ることは「夢のまた夢」に近い状況であった［水俣市環境創造みなまた実行委員会1996：65］。その意味で、松崎氏の語りは、90年代の水俣と御所浦において、異なったあり方で公害の歴史が引き受けられていることを暗示しているといえるだろう。この語りはまた、「公の場で水俣病の話がタブー」である様子を示唆しており、（A）「水俣病経験に関する沈黙」が強いられる状況を提示していると思われる。

加えて、松崎氏は「チッソあたりはお金を払ったからこれで終わったと思うとるやろうけど、私個人としては、まだ水俣病は終わっていない」［水俣病患者連合1998：162］とも語っている。彼にとって、もやい直しセンターの建設は「のさり」として水俣病を終わらせないために必要だったのかもしれない。では一体、御所浦での「もやい直し」はどのような形で進行しているのだろうか。残念ながら、1995年の政府解決案以降の語りは残されていないため、その後の状況は明らかになっていない。

## ５．おわりに

以上、本稿では御所浦島民の水俣病経験を先行研究から検討してきた。暫定的な結論として、第３節で抽出されたテーマを聞き書きから検証した結果を提示し、今後の展望を述べたい。

（A）「水俣病経験に関する沈黙」について。90年代の御所浦においても行政主体となって水俣病を語ることは夢の夢であり、島の漁師たちの声は行き場を失っていることが示唆された。水俣病に関する漁師たちの「沈黙」とは、彼らが語らないのではなく、語る場がないという状況から生み出されたのかもしれない。また、漁師専業の島であるという理由から、島民にとって水俣病の話は「タブー」に近い状況だったことも否定できないだろう。いずれにせよ、その声なき声がいかなる形で発せられたのかは不明のままである。田口は漁師の「沈黙」と観音像の建設を関連づけているが、聞き書きで観音像について言及されることはなかった。今後は観音像建設に携わった漁協関係者からの聴きとり調査も含めて、現地で水俣病がいかに「語られるのか」を検証する必要があるだろう。

（B）「海・魚との親密な関係」について。魚は御所浦の食生活に深く根付き、島民と分かちがたい結びつきがある可能性が示唆された。（A）と関連する点であるが、ではなぜそのような「魚族」に対し感謝の意を示す目的で、「沈黙」が生じていた90年代に観音像が建設されたのだろうか。「海・魚との親密な関係」をより深く理解するためには、島民、とくに漁師の視点から海・魚を捉える試みが不可欠である。

（C）「のさり＝受難」について。聞き書きでは、水俣病という受難を「のさり」という言葉で表現する者はいなかった。逆に、「まだ水俣病は終わっていない」という声があり、御所浦での「もやい直し」の必要性が語られていた。今後は「のさり」が言及される文脈を聴きとり調査から探っていくことで、御所浦のなかでの「のさり」について検討する必要がある。

（D）「不知火海水俣病」について。土本のいう「不知火海水俣病」が、現地の人びとの語りから提示されていた。とくに、水俣との地理的距離や基幹産業としての漁業を意識する語りが多く、そこからは水俣病被害の「一地域」として一般化して語れるような経験ではないことが提示された。ただし注意すべきは、御所浦における水俣病経験から「水俣病の経験は本来もっと複雑である」というミクロ視点的な結論へ帰着するのではなく、水俣病をめぐる社会的・経済的・政治的な文脈の内部で重層的に規定されるものとして、御所浦の特異性を捉えていかなければならないことである［cf. Hall 2016］。

そして今後は、上述した課題を検討するために、次のアプローチを採用したい。自ら漁労活動など

に参加し、そうした経験の蓄積によって、現地の人びとの眼から見た世界を捉える。もちろん、それは現地調査がほとんど実施されてこなかったからではなく、御所浦島民の視点から「海・魚」や「のさり」を検討することで初めて、水俣病を「沈黙しながら語る」というあり方や、言葉にならない過去をときに背負いながらも海・魚と生きるという営みを捉えることできると思われたからである。このアプローチをする自身の経験が部分的であることを反省的に自覚しながら、今後は現地での調査を実施していく。

【謝辞】本稿の執筆にあたっては、慶田勝彦先生（熊本大学）、下田健太郎先生（熊本大学）から適切なご批判と貴重なご助言を頂きました。また、ジョシュア・リカード先生（熊本大学）には、英文校正に関してお世話になりました。そして、「水俣病センター相思社」の方々には、資料の収集に関してご協力を頂きました。この場を借りて、ご教示とご協力を頂いた皆さまに心より感謝申し上げます。

**注**

（1）天草市「国勢調査における人口と推移」https://www.city.amakusa.kumamoto.jp/kiji003726/index.html 2021年10月22日閲覧

（2）チッソは1932年からアセトアルデヒドの製造を開始した。水銀を触媒としてアセトアルデヒドを合成する方法は古くからあったが、チッソは独自の製造法を開発し、その工程においてメチル水銀が副生されていった［高峰2017：48］。社名に関しては、1908年に日本窒素肥料が発足して以降、1950年に新日本窒素肥料、1965年にチッソと変更されている。本稿では、社名が議論の対象となるわけではないため、1965年の以降の「チッソ」で統一している。

（3）「水俣病」という概念に関する議論がある。たとえば、富樫［2017：13］は、「工場排水による広範な海の汚染とそこに生息する汚染魚介類を介した多様な健康被害を表現する概念としては適切なものとはいえない」という問題認識から、「いわゆる水俣病」を意味する〈水俣病〉を用いている。また、慶田［2020］は、現在でも問題含みという認識から「通過中の呼称であり、概念であることを示すために」、〈水俣病〉としている。本稿ではこうした議論を踏まえ、便宜上、1932年から1968年にかけてチッソ水俣工場が水俣湾に流した工場排水に起因するメチル水銀中毒を「水俣病」と呼ぶが、今後のフィールドワークを通して、御所浦での経験を〈水俣病〉とするべきか考えていきたい。

（4）土本のいう「水俣病かくし」とは、チッソの「いわゆる有機水銀説に対する工場の見解」、日本科学工場会大島理事による「海中破棄の旧軍爆薬原因説」といった世論操作や、通産・厚生省が熊大研究班へ「結論の発表は慎重に」と申し入れたことなどを指す。汚染源の確定に対する妨害についてより詳しくは、『水俣病事件資料集（上）』［水俣病研究会1996：109-111］を参照されたい。

（5）調査対象が狭められる以前の疫学的調査は、熊本・鹿児島の両県を含めた不知火海を一つの海域として捉えた広範囲のものであった。たとえば、1959年に熊本県水産試験場が実施した「不知火海の概要と水俣調査中間報告」では、御所浦で汚染魚と思われる魚の浮上が確認されている［岡本2015：47-54］。

（6）「見舞金契約」は、死者30万と葬祭料２万円、成人年金10万円の補償金を支払う内容で結ばれた。また、将来チッソの工場排水が原因とわかっても新たに補償請求はしないことが内容に盛り込まれた。この契約は、1973年の第一訴訟判決で、公序良俗違反で無効とされている［高峰2018：61］。

（7）サイクレーターとは、1959年の有機水銀説発表、漁民らの工場排水の完全浄化設備設置要求、通産省の指導などをうけて、チッソが造った排水処理施設である。実際にはメチル水銀化合物を処理する設計

にはなっていなかったが、排水問題への社会的PR効果は大きく、「水俣病終息」の流れにつくった［高峰2018：62］。

（８）原田は、この終息説が根拠のないものであることを実証的なデータから指摘している［原田1983：331-333］。

（９）宮澤は『水俣病に対する企業の責任』（1970）を執筆する段階から、水俣の対岸にも被害者がいることを確信していたという［宮澤1997：55］。

(10)「放りっぱなしの十年」と題された記事は、『告発』27号（1971年８月）に記載されている。他にも、『告発』では、26号（1971年７月）、28号（1971年９月）、35号（1972年４月）、41号（1972年10月）、47号（1973年５月）などで御所浦の人びとが放置された存在であったことを報告している。

(11) 認定申請者に関する報告は、61号（1974年８月）、107号（1978年８月）、136号（1981年８月）、143号（1982年７月）などを、放置された被害者についての報告は、83号（1976年６月）、117号（1979年９月）などを、不知火海・巡海映画（詳細は次節）に関する報告は、97号（1977年９月）、98号（1977年10月）、116号（1979年７月）などを参照されたい。

(12) 詳細は『ごんすい』24号（1994年９月）の「御所浦の海」を参照されたい。

(13) たとえば、原田は、胎児性水俣病についての医学的研究から「水俣学」構築まで、水俣病被害者のために献身的な活動をおこなってきた。また、水俣病研究会はチッソの過失を立証する有効な理論を構築し、水俣病第一次訴訟の勝訴に大きな役割を果たした［水俣病研究会1970］。

(14) 水俣茂道の患者である杉本栄子氏は、水俣病すらも「のさり」と捉えることで、「人としての生活が取り戻せた」［栗原2000：146］という。水俣病が引き起こした分断（人と自然、人と人）を前向きに乗り越える意味で用いられており［e.g. 藤崎2013］、竹熊が捉えた御所浦での「のさり」とは一線を画すように感じられる。

(15) 上映された映画は、「医学としての水俣病（三部作）」（1974-1975）や「不知火海」（1975）などである。

(16) 熊本大学第二次研究班とは、熊本大学医学部10年後の水俣病研究班を指す。公式確認後の原因究明にあたった「第一次」研究班に対し、二次研究班はその後の状況を調べるものであった［高峰2018：63］。

(17) たとえば、松村氏は身体の具合が悪くても、当初は水俣病と結びつけて考えていなかったと語っている［水俣病センター相思社2002：75］。また、『告発』（第26号、1971年７月）は920ppmを記録した女性の壮絶な末期を伝える記事のなかで、水俣病の症状が明らかにあったにもかかわらず、死亡届が「老衰」であったことを報告している。ここからは、御所浦で水俣病患者が初めて確認される1972年以前にも、島民には水俣病の症状・反応をもつ者がいたが、水俣病と結びつけて考えられていなかったことが示唆される。

(18) 1995年の水俣において市民を対象とした講座のなかで、この発言がされた。小林氏と松村氏が対談する形で講座は進められたのだが、水俣との差異を強調する語りが多くみられた。本稿では十分に検討できなかったが、語りの場が語りの内容に影響を与える可能性がある。

(19) 2018年度の漁業センサスによると、御所浦の漁業経営体数は、154である。不知火海沿岸地域の倉岳（42）、栖本（23）、新和（69）と比べると、その数はダントツである。詳細は天草市HPの「漁業センサス」を参照されたい（https://www.city.amakusa.kumamoto.jp/kiji003730/index.html）2021年10月22日閲覧。

(20) 1995年の政府解決案とは、水俣病ではないが、一定の症状のある人（四肢末端優位の感覚障害）のある人を対象に、一時金260万円と医療費を支給するものであった。この解決案を唯一拒否したのが関西訴

訟グループで、2004年に最高裁は関西訴訟の上告審で国と熊本県の責任を確定した［高峰2018：65］。それ以降の認定申請者の増加や訴訟に対処するために、「最終解決」と銘打った水俣病特別措置法が2009年に制定されている。特措法がはらむ問題については、たとえば富樫［2017：122-132］を参照されたい。

（21）もやい直し事業の正式名称は、「環境創造みなまた推進事業」である。この事業の最大の目的は1992年の国際環境会議の開催であったが、国際会議終了後は県主導から地元主導に転換し、市民参加の実行組織によってイベントなどが運営されるようになる［山田1999：37］。そうしたなかで、「もやい直し」は「水俣病問題を克服し新たなまちづくりを進めるために、水俣病被害者や支援者、加害企業、行政が互いに歩み寄って協力し合うことを呼びかける標語」［山田1999：32］として用いられた。

（22）もやい直しセンターとは、「もやい直し事業」の一環として、水俣（「おれんじ館」、「もやい館」）や芦北（「きずなの里」）に建設された施設である。

**参考文献**

井上ゆかり 2020『生き続ける水俣病』藤原書店.
岡本達明 1978『近代民衆の記録７　漁民』新人物往来社.
――― 2015『水俣病の民衆史　闘争時代 上（第三巻）』日本評論社.
栗原彬編 2000『証言　水俣病』岩波書店.
慶田勝彦 2020「刊行によせて」有馬澄雄編『〈水俣病〉Y氏裁判放置事件資料集』弦書房.
小林洋一郎 1986「御所浦日記」『思想の科学』78：64-68.
御所浦町 2005『御所浦町誌』御所浦町.
高峰武 2017「歴史と現在」花田昌宣・久保田好生編『いま何が問われているか　水俣病の歴史と現在』くんぷるpp. 9-106.
――― 2018『８つのテーマで読む水俣病』弦書房.
田口宏昭 2004「遠景としての水俣」丸山定巳ほか編『水俣の経験と記憶』熊本出版文化会館pp.163-196.
竹熊千晶 2005「のさりの海」丸山定巳ほか編『水俣からの想像力』熊本出版文化会館pp. 71-92.
土本典昭 1991「遅れて来た離島の被害者たち」『水俣病の現在』（写真集『水俣』新装版小冊子）pp. 5-6.
――― 2000（1979）『わが映画発見の旅』日本図書センター.
――― 2004（1974）『映画は生きものの仕事である』未来社.
角田豊子 1983「天草の女」色川大吉編『水俣の啓示（下）』筑摩書房pp. 383-427.
富樫貞夫 2017『〈水俣病〉事件の61年』弦書房.
羽賀しげ子1985『不知火記』新曜社.
原田正純 1983「不知火海有機水銀汚染の医学的追究」色川大吉編『水俣の啓示（上）』筑摩書房pp. 325-385.
――― 1989『水俣が映す世界』日本評論社.
――― 2007『水俣への回帰』日本評論社.
藤崎童士 2013『のさり』新日本出版.
水俣病患者連合編 1998『魚湧く海』葦書房.
水俣病研究会 1970『水俣病に対する企業の責任』
――― 1996『水俣病事件資料集（上）』葦書房.
水俣病を告発する会 1974『告発（縮刷版続編）』

――― 1989『縮刷版水俣』葦書房.
水俣病センター相思社 1994「御所浦の海」『ごんすい』24号pp. 3-7.
――― 1995『ごんすい特集：御所浦島』28号.
――― 2002『豊穣の浜辺から』
宮澤信雄 1997『水俣病事件四十年』葦書房.
森千代喜 1997『我が雨もいとわず段草を切る』世織書房.
山田忠昭 1999「『もやい直し』の現状と問題点」水俣病研究会編『水俣病研究』1：31-44

**英語文献**

Hall, Stuart. 2016. *Cultural Studies 1983: A Theoretical History*. Duke University Press.